



〔監修〕

小松左京／紀田順一郎

野十二全集



三一書房

海野十三全集

第2巻 俘囚 (第11回配本)

1991年2月28日 第1版第1刷発行

Printed in Japan

監修者	小松左京
	紀田順一郎
発行者	畠山滋
印刷所	日本写真印刷(株)
製本所	東京美術紙工

発行所

株式会社 三一書房

東京都文京区本郷2-11-3
電話 03(3812) 3131~5 番
振替 東京 9-84160 番
郵便番号 113

落丁・乱丁本はおとりかえいたします
ISBN4-380-91538-7

© 1991年

俘囚・目次

幸運の黒子 はくろ	7
夜泣き鉄骨 よな てつこつ	13
爬虫館事件 はちゆうかん	31
間諜座事件 かんちようざ	53
キド効果	67
赤外線男 せきが いせんおとこ	85
地獄街道 じごくかいどう	127
ゴールデン・バット事件	141
柿色の紙風船 かきいろ かみふうせん	167
蠅 はえ	183

俘囚ふしゆう 207

疑問の金塊きんかい 225

恐怖の口笛くちぶえ 245

三人の双生児そうせいじ 313

或る宇宙塵の秘密うちゆうじん 359

地中魔ちちゆうま 367

鍵から抜け出した女ぬ 401

蠅男はえおとこ 425

解題〔長山靖生〕 557

俘

囚

——海野十三全集・第2卷——

幸運の
黒子^{ほくら}

「どうして、俺は、こう不運なんだろう」

病院の門を出ると休え休えた鬱憤を、アスファルトの路面に叩きつけた月田半平だった。

院長は、なアに大丈夫ですよ、こんな病気なら、注射の五十本もやれば、造作なく癒りますよ、但し五十本が一本欠けても駄目ですよ、それをお忘れのない様に——と云った。一回三円として、百五十円の金がいるわけだ。ああ、これが、タッタ一度の代償なんだ。

たった一度——というのは、すこし説明を要するが、この半平は、元来、貞操堅固の男だったのを、友人達が引っぱりだして、東都名物の私娼窟玉の井へ、連れて行ったのだった。これは、友人にも多少の悪企みはあったにしても、主たる動機は、半平という男が細君に死別してから、まる二年この方、空閨を貞淑に守りつづけているのを見ちやいらなかったせいだった。そして半平は、飽くまでも、亡妻への貞操を死守するつもりだったのであるが、彼のエネルギーな敵娼の理解を得ることが出来ず、遂に暴力を以て征服されちゃったのである。そして、数日後に、半平は身体の一部に異常を発見したのだった。彼にとって、それは、踏んだり蹴ったりの不運だった。

いや、それよりも、さしあたり大問題なのは、あと四十九回の治療代を、どうして捻出すべきか、というこ

とだった。

これが五年前なら、五千円の貯金があった。だが、その年の暮に、三千円というものを費つて、新妻を持った。その細君は、更に次の年に、慢性病になり転地療養をすることになって、残額の二千元は、バタバタと無くなつてしまつた。そして貯金通帳から、最後の五十銭までが、綺麗に払い出されると、間もなく、細君の寿命も、天国に回収されてしまつた。彼は全く無一文になつたのだった。

（四十九回の注射をやらなければ、此の身がだんだん腐つてゆく！）

こうなると、半平は、泣いてばかりも、居られなかつた。

三日三晩、考えぬいた揚句、やつとの思いで、彼は案外手近に、一つの案を発見したのだった。

「どうだったね。貸して呉れたかい」

半平は下宿の二階の部屋に待つていてくれた友人、川原剛太郎の顔を見るが早い、こゝう声をかけたのだった。その友人は××生命へ出ている男だった。

「うん、貸しては呉れたがネ」友人は、煙草の煙を、忙しそうに吸つた。「君の云うほどは駄目だったよ」

「じゃ、いくら貸したい。二百円か」

「うんにゃ、その半分。百円だア」

「チエツ、百円ばつちか、それじゃ、治療代にも足りやしない」

半平は、川原の××生命へ、一万円の保険を懸けていたのだ。此の際、払込金の一部を、低利で貸して貰おうと思つて、川原に交渉を頼んだのだつたが、それが最高百円では、すっかり予想を裏切つてしまつた。

「どうも気の毒だがネ、どうにも仕様がないうよ。これが君の細君の保険だつたらこんとこで、君は一万円の紙幣束を掴んでゐる筈だつた」

「そう云えば、なるほど。どうして俺は、こう不運なんだろう！」

「不運といへば、思い出したがネ」友人の川原は、改まつた口調で、語りだした。

「神竜子という観相家の話を聞いたんだが、君、幸運の黒子というのがあるんだ。顔に出来てゐる黒子といへば普通、鼻筋を中心として、左側にあるに決まつていて、右側にあるのは非常に稀なんだそう。そう云われて、氣をつけて人の顔を覗いてみると、なるほど顔の黒子は、皆左側にあるネ。ところで、右側に黒子のある人間が全然居ないかというところ、そうでもないのだ。極めて稀だが、あるにはある。そして右側に黒子のある人は大変幸運なんだそうだよ。君も、いつまでも鰥夫でいずに今

度は、幸運の黒子のある若い女でも探しあてて、再婚してはどうかネ」

大変、耳よりな話だつた。

自分の顔に、幸運の黒子を植えつけるわけには行かないが、鮮やかな幸運の黒子をもつ若い女を、女房に持てば、相当運が向いてくるだろう。

「そりゃ本当かい」半平は、問いかえさずには居られなかつた。

「神竜子の云ふことだもの、絶対に信用が置けるさ」

友人は、半平の懷疑を嘲るように、云つた。

「それでも五分間ほど、この儘、安静にしてい下さう」

院長は、注射器とアンプルの殻とを、看護婦に手渡しながら、云つた。

「最初のうちは、どうしても注射の反応は、強いですよ。これで、まだ二回目だから。では、お静かに」

そういつて、院長は室を出ていった。あとには、看護婦が残つて、手術器械をカチャカチャと片付けているばかりだつた。

「あ、そんなに——」頓狂な声をあげて、看護婦が、飛んできた。「お動きになつては、いけません。痛みますか、もし……」

眼を閉じていた半平の顔のあたりに、若い女の体臭が、ムンムン匂ってきた。彼は胸の興奮で、締めつけられるようだった。狭く眼を閉じたまま、嗅覚で、若い看護婦の全身を紙めまわしている半平だった。

「声を出しちゃ、いけませんよ」看護婦の熱い呼吸が、イキナリ半平の耳許でしかかと思うと、彼の一方の手首は、ギュッと握られてしまった。「これを、あとでお読みになって下さい！」

「!?」半平は、ことの意外に驚いて、看護婦の顔を見上げた。

「おお、……」彼は、も少して、大声を出すところだった。逃げるように急ぎ足で室を出てゆくその看護婦の、肉付のいい顔の右側に、黒大豆をソッと貼りつけたような黒子が明らかに認められた。おお、幸運の黒子！

往来へ出ると、半平は、若い看護婦から、掌のうちに握らされたいくつにも折り畳まれてある紙片を、開いてみた。そこには、鉛筆の走り書で、こんな文面が認められてあった。

「失礼ごめん遊ばせ。病院で一回三円かかる注射を、あたしの下宿へ午前八時二十分までにおいで下されば、半額でいたします。

小石川区××町つばみアパート七号室

半平の顔が、だらしなく解けた。行人の巷に、曝すのが苦しいニコニコ顔だった。

「幸運の黒子を持った女を、一目見ただけで、こうも運がよくなるものか！」

注射料は半額で済むことにはなるし、幸運に恵まれた若い女は探しあてるし、それに、あの唐崎さんという看護婦の、すばらしい性感はどうだ！

彼は、直ぐにも、飛んで帰って、唐崎さんと握手をしたくてたまらなかった。

筋書どおりに、唐崎さんと、いつしか同棲するようになった半平だった。新婚旅行も、唐崎さん——ではない新妻みどりの稼ぎためた財布のお蔭で、南伊豆まで遠出をし、温泉気分と夫婦生活とを満喫することができた。

だが、東京に帰ってくると、半平は重病になって、ドツと床についてしまった。高熱が、いつまでも下らなかった。食物も碌々口へ入らなくなつて、とうとう、新婚後、三十日と経たないのに、

「ナナナ、ナニが幸運の黒子だッ！」と呻りながら、半平は鬼籍に入ってしまったのだった。哀れな半平だった。

た。話はこれでお仕舞である。

* *

蛇足を加えるならば、半平の考えは、間違っていた。幸運の黒子は、やっぱり幸運の黒子だった。なぜなら、半平の死と共に、一ヶ月で未亡人になったみどりは、××生命から、現金で金一万円也を受取った。それは亡夫の懸けていた生命保険だったことは、読者諸君のよく御承知のところである。

幸運の黒子は、みどりにあったので、半平にあるのではなかった。

半平の認識不足が、この物語を生んだのだった。

夜泣き鉄骨

よ

な

て

つ

真夜中に、第九工場の大鉄骨が、キーンと声を立てて泣く——

という噂が、チラリと、わしの耳に、入った。

「そんな、莫迦な話が、あるもんか！」

わしは、検査ハンマーを振る手を停めて、カラカラと笑った。

「そう笑いなさるけどナ、組長さん」その噂を持ってきた職工は、慄えた眼を、わしの方に向けて云った。「昨夜のことなんだよ、それは……。火の番の、常爺が、両方の耳で、たしかに、そいつを聴いたよって、蒼い顔をして、此のおいらに話したんだ。満更、偽りを云っているんだア、思えねえ」

いつの間にか、わし達の周りには、大勢の職工が、集つてきた。

「組長さん、それア本当なんだ」別の声が叫んだ。

「なんだとオ——」おれは、その声のする方を見た。

「てめえは、雲的だな。雲的ともあろうものが、軽卒なことを喋って、後で笑れんな」

「大丈夫ですよ——」雲的は大いに自信ありげに、言葉をかえした。「それについてちや、ちイッとばかり、手前の恥も、曝けださにならねえが、もう五日ほど前のことでさア。徹夜勝負のそれが、十二時を過ぎたばかりに、スッカラカンでヨ、場に貸してやろうてえ親切者もなしサ、やむなく、工場の宿直、たあさんのところへ、真夜中というのに、無心に来たというわけ。さ、その無心を叶えて貰つての帰りさ、通り懸つたのが今話しの第九工場の横手。だしぬけに、キーイッという軋るような物音を聴いた。（オヤ、何処だろう）と、あつしは立停った。暫くは、何にも音がしねえ。（空耳かな？）と思つて、歩きだそうとすると、そこへ、キーイッとな、又聞えたじゃねえか。物音のする場所は、たしかに判つた。第九工場の内部からだッ。（何の音だろう？ 夜業をやつてんのかな）そう思つたのであつしは、顔をあげて、硝子の貼つてある工場の高窓を見上げたんだが、内部は真暗と見えて、なんの光もうつらない。（こりや、変だ！）俄に背筋が、ゾクゾクと寒くなつてきた。そこへ又その怪しい物音が……。恐いとなると、尚聴きたい。重い鉄扉に耳朶をおつつけて、あつしア、たしかに聴いた。キーイッ、カンカンカン、硬い金属が、軋み合い、嚙み合うような、鋭い悲鳴だった」

「大方、工場に、鼠が暴れてるんだらう」わしは、不